

## 電気味覚検査における健常者の閾値について

◎石郷 景子<sup>1)</sup>、中島 直美<sup>1)</sup>、澤村 聖子<sup>1)</sup>、樋口 修<sup>1)</sup>  
大垣市民病院 医療技術部 診療検査科 生理機能室<sup>1)</sup>

【目的】味覚障害の診断には血清中の鉄や亜鉛などの微量元素の測定や味覚障害の程度や治療効果を評価するために味覚検査が行われる。味覚検査には電気味覚検査や濾紙ディスク検査が推奨されている。電気味覚検査法は舌を陽性の直流電流で刺激すると酸味の混じったような独特の味がする。この現象を用いて閾値を求める方法である。近年、臨床検査技師も味覚検査が業務の一部になったため、正常閾値を測定したので報告する。

【対象と方法】対象は味覚異常を伴う疾患がない43名（男性15名、女性28名）、年齢22～64歳（ $41.6 \pm 12.5$ 歳）。方法は刺激には直流電流を用い、直径5mmのプロープ（陽極）を検査部位に押し当てて通電し、味を感じた時にボタンを押してもらう。不関電極は被検者の頸部に装着する。検査部位は左右の鼓索神経、舌咽神経、大錐体神経領域の計6カ所 で測定した。刺激時間は0.5～1秒とし、刺激の間隔は3秒以上とした。刺激はまず10～20dB程度の通電で電気味覚の味を体験させた後で、低電流より刺激を開始し上昇法で閾値を測定した。自覚した味は鉄をなめたような

味で、強い電気刺激の時に生じるピリッとした体性感覚とは区別した。

【結果】閾値を求めた。①鼓索神経 LT側中央値0（ $\leq 8$ ）、RT側中央値0（ $\leq 12$ ）、左右差中央値0（ $\leq 4$ ）②舌咽神経 LT側中央値0（ $\leq 8$ ）、RT側中央値0（ $\leq 8$ ）、左右差中央値0（ $\leq 4$ ）、③大錐体神経 LT側中央値4（ $\leq 24$ ）、RT側中央値4（ $\leq 20$ ）、左右差中央値2（ $\leq 8$ ）。

【考察】健常者においても閾値にばらつきはみられた。閾値にばらつきがみられたのは、大錐体神経領域で年齢が高くなるほど閾値が高い傾向にあった。また、薄味か濃い味かを好むかどうかによっても閾値のばらつきに影響がでると思われる。

【結果】健常者の電気味覚の閾値を測定した。年齢によっても閾値にばらつきがみられ、左右差を指標に入れるのも重要である。

連絡先：（0584）81-3341（内線1271）